

# 「前と後ろの守り手」

出エジプト 13: 17-22

ジェリー藤尾という歌手の「遠くへ行きたい」という歌の「知らない町を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい」という歌詞を口ずさみながら知らない町を自由に歩き、あちこち一人で旅するのが好きでした。でもそれは全くフリーで旅を楽しむ時の話です。重要な用件であったり、大切な人と初めての場所で会う約束をした時はそうはいきません。行くまでにどのくらいの時間がかかるのだろうか、見取り図に誤りはないだろうか、時間と場所は本当に正しいのかと色々不安が出てきます。そのような時に誰か案内をしてくれる人がいるとありがたい訳ですね。

この出エジプト記はイスラエルの民たちが出エジプトをした時の出来事が記されています。イスラエルの民たちは、神様がアブラハムに約束した約束の地カナンを目指しました。いわば自分たちのふるさとへの旅をしたのです。ふるさととは言ってもカナンを出て430年も経っているのですから、指導者のモーセを始めとして誰一人自分のふるさとを見たことがなく、何が待ち構えているかも分からない訳ですからどの人も不安な思いでいたのではないのでしょうか。

東京の板橋区で牧師をしていた時に、京都に住む70代の方から、大学の同窓会で上京するからついでに寄ってもいいかと連絡を貰いました。教会への道順をお話しようとしたら、「学生時代、板橋区に下宿していたから大丈夫です」と自信満々に言われました。ところが彼は約束の時間から2時間遅れて教会に着き、「いやあ参っちゃった。50年も経ったら東京のすっかり変わっていて道に迷いました」と謝られました。50年も昔の記憶と大丈夫という根拠のない自信だったのです。

イスラエルの人たちも誰一人としてふるさとを知らなかったのですから、自信の欠片もなかった筈です。そのような時に神様が昼は雲の柱、夜は火の柱となってイスラエルの200万ともいわれる人たちを導いてくださったのです。その姿を見た時にイスラエルの人たちはどんなに頼もしく、安心したことでしょうか。13:21,22のところの主語は「主は」述語は「離れなかった」です。イスラエルの人たちはどれだけ神様から離れた事が数え切れません。けれどもご真実な神様は、民たちがどんなに離れても決して離れることはなさらずにイスラエルの民たちの前の守り手となってくださったのです。ところがエジプトとの問題はすっかり決着がついて、これから新しいカナンの地に進めばいいのだと思っていた時、ふと後ろを見たら後ろからエジプトの大戦車隊が追いかけて来るのが見えたのです。その時、イスラエルの人たちの心は前への不安よりも後ろへの恐れの方が強くなりました。私たちの人生には時として後ろに問題が生じることがあります。後ろとは何でしょう。後ろとは過去であり、男性にとっては家庭ではないのでしょうか。イスラエルの民たちがエジプトの戦車隊を見てパニック状態に陥った時に、今までイスラエルの人たちの前を守っていた神様がこの時後ろに移って後ろの守り手となってくださったのです。『ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移って、彼らのあとを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移って、彼らのうしろに立ち、エジプトの陣営とイスラエルの陣営との間に入った。それは真っ暗な雲であったので、夜を迷い込ませ、一晩中、一方が他方に近づくことはなかった。』(出エジプト

14: 19、20)

現代の私たちはこのような雲の柱、火の柱を目で見る事は出来ません。けれども神様のご臨在を感じる事は出来ます。それが証です。信仰図書には素晴らしい証集が沢山ありますが、自分の人生の中で絶体絶命の危機的状況に立たされた時に他の人の証で本当に安心する事が出来るのでしょうか。私たちが聖別された人生を送る為には、他人の借り物ではなく自分の証を持つという事が大事なのです。

45歳で障害児施設の園長を辞めて献身をした時、周りから勿体無い、頭がおかしくなったんじゃないかなど言われました。常識的にはその通りです。献身の動機になったのは、8歳の時にお預かりした男の子が18歳になったある時の朝、突然苦しみだして病院に連れて行きましたが原因が分からずその日の夕方亡くなった事にあります。施設に来た時何も出来なかった子が長い時間をかけてやっと自分で自分の事が出来るようになったと喜んでいた時でした。この世にハンデを追って生まれてきた子に君たちの事を神様は心から愛しているよと何より優先して伝えなければならぬとその時思ったのです。そして1年引継ぎをしてからという条件で退職が決まりました。半年たったある秋の朝、宿舎のリビングルームから見える遊歩道のある杉林の上にかが字が見えないかと家内が聞いてきました。目を凝らして見ると杉林の梢の天辺に『出』という漢字が見えました。小3の息子にも聞くと同じ字が見えたのです。家族3人が同じ場所に同じ字が見えたという事は、神様がここを出ることは正しいんだよと教えてくれている印だと確信したのです。その翌日から家族は起きると必ずリビングルームに真っ先に行き『出』という字があるかを確認するのが日課になりました。その『出』という字は、雨の日も雪の日も嵐の日もどんなに杉林が揺れても崩れず続いたのです。神学校を出てから施設に寄る機会があり、朝住んでいた宿舎に行き、リビングルームから今まで何度も見た杉林を見た時、思わずあっと声が出ました。その『出』という字はなかったのです。角度を変えて見てもありませんでした。その時、神様が私たちの為特別にこの印を見せてくださっていたという事に気づいたのです。

4千年前にイスラエルの民たちに目に見える形で雲の柱、火の柱として導いてくださった神様は今も生きて働いておられる神様です。その神様が私たちの人生の前と後ろの守り手となってくださるとしたら何を恐れる事があるのでしょうか。私たちはイスラエル人ではありませんが霊のイスラエル人です。ですから自分の目で色んな事を見せて貰ったのに神様の御業を忘れてしまったイスラエルの民たち様ではなく、今も神様は生きて私たちを守り導いてくださるお方なのだという事をしっかりと心に刻み付けて、聖霊様の導きに従って歩む日々を進めていきましょう。

(要約者:西崎 芳栄)

(2019年5月26日)